小学校事例６

かけがえのない命・つながる命

淡路市立野島小学校高学年

１　テーマ

かけがえのない命・つながる命

２　実践のねらい

身近な人との関わりをとおして、老いや病にふれる体験や、死の悲しみにふれる体験などから、命の有限性や死の普遍性・絶対性に気づき、自他の命のかけがえのなさに思いをはせる。さらに、死の悲しみや苦しみに向き合う人々の思いに接し、人とのつながりを感じ、強く生きようとする心について考える。

３　テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校区は、淡路の北部に位置し自然豊かな農村地帯にある。明石海峡大橋の開通により阪神間へのアクセスは便利になったが、過疎化には歯止めがかからず、現在本校の全児童数は35 名までに減少している。社会が大きく変化する中で、子どもたちの暮らしぶりも変わり、豊かな自然に囲まれながらも自然体験は非常に少なくなり、都会の子どもたちとそれほど大きな差はない。子どもの遊びの形態も変化し、テレビ、ゲーム、パソコン等が中心となり、「命」を軽視した様々な情報刺激があふれている。また、農村地帯であるため３世代同居家庭が多く、祖父母を含めた地域の老人と接する機会は比較的多くあるが、高齢者はかつてのように人生の終末を自宅では迎えることは少なくなり、子どもたちが、人の死を間近で看取るような経験も減っている。

近年、本校においても、人を思いやれない、また、「命」を軽視するような言動が目立つようになってきており、危機感を抱いていた。そのため昨年度より、子どもたちに生きることの素晴らしさや「命」の尊さを心の底から感じさせ、仲間を大切にし、人を大切にしようとする心を培うため、上記のテーマを設定し実践に取り組み始めた。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】
- 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させる。
- 自分の命は両親の願いの結晶であり、毎日を精一杯生きることが大切であることを実感させる。

【感性を育む】
- 遺された者の悲しみを通して、自分の命は一人だけの者ではなく、多くの人たちとつながっていることを実感させる。

【想像力の育成】
- すべての生き物には寿命があり、自分の命も例外でないことを理解させる。

４　事前

(1) 先生の準備
- 授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。
- 教員自身の死に対する思いをまとめる。
- 家庭や地域に対して学習についての理解と協力を依頼するとともに、施設等の関係者と綿密な打合せをする。
- 現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。

(2) 教育課程上の位置づけ
・国語
・理科（植物・生き物等の分野）
・体育（保健分野）
・家庭
・道徳
・総合的な学習の時間

(3) 子どもたちの準備
・自尊感情を高める体験をする。
・デジタルカメラの使用技術を習得する。

(4) 家庭・地域との連携
・地域の人々に対し、アンケート調査や聞き取り学習を実施することについての理解を求める。
・特別養護老人ホームで継続的に体験学習ができるように事前に依頼する。
・祖父母、その知人、家族に対し学習のねらいを理解していただくために通信を発行する。

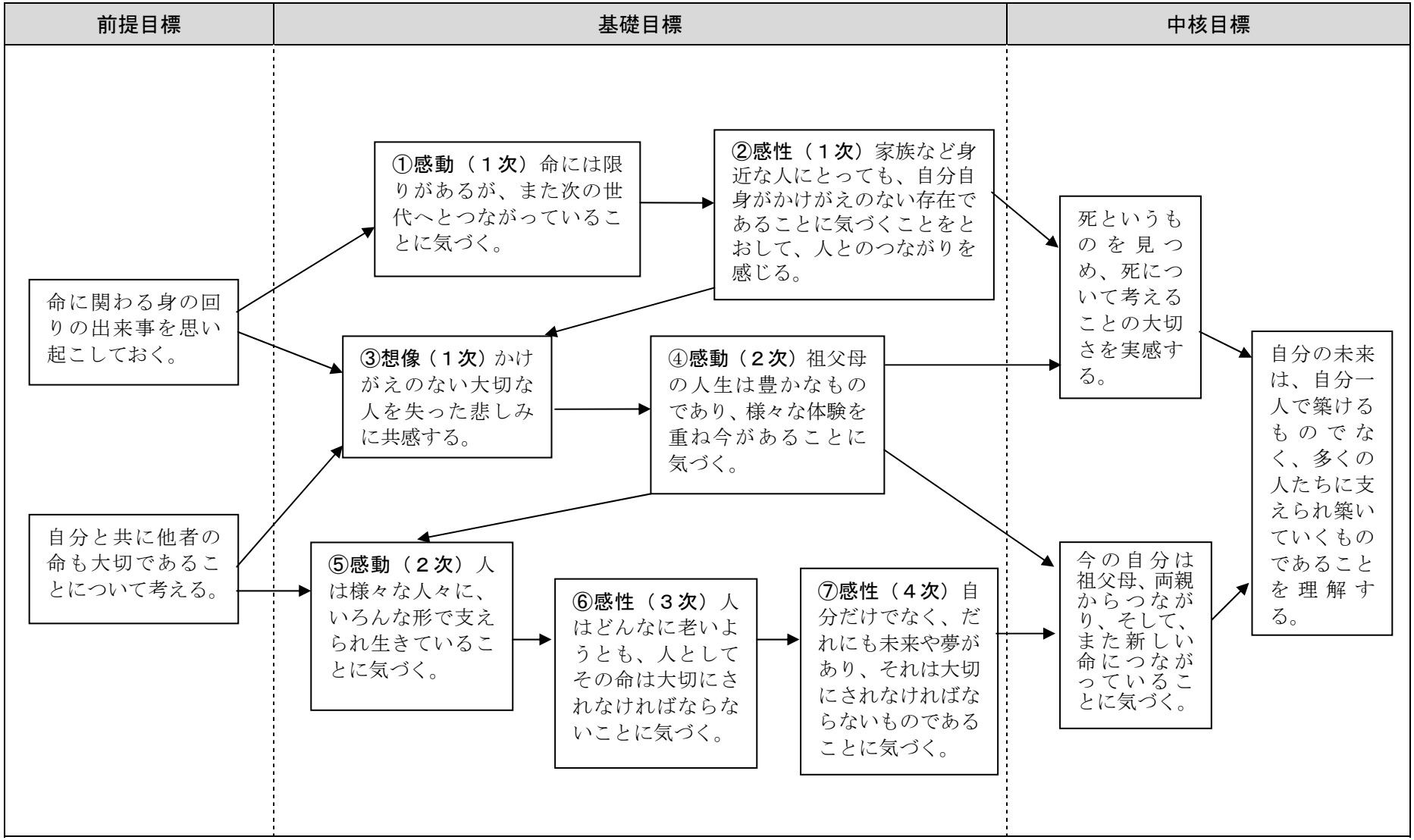
５　本校の実践の特色

本校では、様々な学習の素材を地域に求め、地域とのつながりを大切にした取組を進めている。今回の学習も地域に出かけ、地域の人たちの「死」に対しての思いや考えを聞き取り、それを手がかりにした実践を行った。特に、特別養護老人ホームとの交流においては、老いの豊かさを感じ、病いに立ち向かう人々の素晴らしさを感じられるよう協力を依頼した。また、北朝鮮拉致被害者の会の有本さんを招いての講演会には、地域の人たちにも参加を呼びかけ、子どもたちの学習の取組に関心を寄せ、共に考える機会とした。

６　目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○自尊感情を高める体験をする。	○自他の命の存在に気づく。	○命に関わる身の回りの出来事を思い起こしておく。	○自分と共に他者の命も大切であることについて考える。	
1次（5時間）	○「命」をテーマに写真を撮り、話し合う。 ○家族や大切な人、またはペットを亡くした体験を出し合う。 ○突然に大切な人の命を奪われた人の話を聞き、その悲しみと痛みに共感する。	○命には限りがあるが、また、次の世代へとつながっていることに気づく。 ○我が子を亡くした親の手記を読むことをとおして、子を思う親の思いの深さに気づく。	○家族など身近な人にとっても、自分自身がかけがえのない存在であることに気づくことをとおして、人とのつながりを感じる。	○かけがえのない人を失った悲しみに共感する。 ○死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感する。	○一つの命には限りがあるが、その命はつながっていることを理解させることができたか。
2次（10時間）	○自分と祖父母の伝記を作る。 ○ゲストティーチャーの生きてきた道筋を聞く。 ○できあがった伝記を発表し合う。	○祖父母の人生は豊かなものであり、様々な体験を重ね今があることに気づく。 ○人は様々な人々に、いろんな形で支えられ生きていることに気づく。	○祖父母の人生を思いやることで、祖父母への尊敬や慈しみの念をもつ。 ○高齢者の豊かな知恵や経験に気づく。	○祖父母の人生を知ることから、これからの自分の人生へ思いをはせ、生きることの尊さを感じる。	○人の人生は豊かで多様であり、素晴らしいものであることを理解させることができたか。 ○人も必ず老い、死んでいくが、その命は大切にされなければならないことを理解させることができたか。
3次（3時間）	○老人福祉施設を訪問する。 ○「老い」について考え命の尊厳に思いをめぐらせる。	○高齢者とのふれあいを通じて、自分が他人を元気付けることができることを体験する。 ○高齢者の人生の豊かさ等に気づき、尊敬の念を持つ。	○人はどんなに老いようとも、人としてその命を大切にされなければならないことを理解する。	○人も必ず老い、死を迎えることを理解する ○高齢者とのふれあい体験をとおして老いることを理解する。	○人はどんなに老いようとも、人としてその命を大切にされなければならないことを理解させることができたか。
4次（5時間）	○家族からの手紙を読み、自分の命は自分だけのものではないことを実感する。 ○未来の自分に宛てて手紙を書く。	○自分の命は多くの人に支えられ、愛され育まれてきたものであることに気づく。 ○今の自分は祖父母、両親からつながり、そして、また新しい命につながっていくことに気づく。	○自分を大切にすることは両親や家族、周りの人の願いであることを実感する。 ○自分だけでなく、だれにも未来や夢があり、そして、それは大切にされなければならないものであることに気づく。	○自分だけでなく、友だちの命も多くの愛情に支えられ育まれてきたものであることに気づく。 ○自分の未来は、自分一人で築けるものでなく、多くの人たちに支えられ築いていくものであることを理解する。	○自分の命は、自分だけのものでなく、両親や家族にとってかけがえのないものであることを感じ取らせることができたか。
事後	○振り返りカードにより、学習の成果を確認する。				

７　目標構造図



（凡例）①感性（１次）:「①」は指導の順路、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「(１次)」は学習活動が「１次」であることを示す。

８　事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修

	研修内容
a	○自尊感情を高める体験をする。　＜提言 P64：教員研修テーマ①＞ ・『わたしはわたしが好きです。なぜなら・・・』 ・『ここがあなたのいいところ』
b	○自己再発見の体験をする。　＜提言 P68：教員研修テーマ②＞ ・「私の人生の振り返り」
c	○医療施設や老人福祉施設等で行われている介護やケアについて知る。 ・老・病・死と向き合う人々の様々な考えや生き方にふれ、命の尊厳について考え、意見交換をする。

(2) 指導の概要（全 23 時間）

	内容
事前	○自尊感情を高める体験をする。（１時間） 教員研修　a
1次（5時間）	○「死」を見つめる。 1　季節の変化による生き物の様子の変わり方を思い出し、話し合う。（１時間） 2　校庭に出て子どもたちにデジタルカメラで「命」をテーマに写真を撮らせ、発表する。(昆虫等の死がい等を意識させる)（１時間） 3　家族や大切な人、ペット等を亡くした体験について話し合う。（１時間） 4　「北朝鮮拉致被害者の会　有本嘉代子さん」の話を聞き、大切な人を突然奪われた家族の痛みと悲しみに共感する。（２時間）
2次（10時間）	○自分と祖父母の伝記を作る。 教員研修　b 1　家族から聞き取ったことをもとにして自分の伝記をつくり、今までの自分の人生を振り返る。（２時間） 2　自分の祖父母の今までの人生の道筋を聞き取り、まとめる。（２時間） 3　ゲストティーチャーで来てくれた祖父の今まで生きてきた道筋を聞く。（１時間） 4　聞き取った自分の祖父母の伝記を作る。（３時間） 5　できあがった伝記を発表し合い、人生の豊かさと多様さを感じ、誰の人生もかけがえのない大切なものであることを実感する。（２時間）
3次（3時間）	教員研修　c ○老人福祉施設を訪問する。 1　老人介護の手伝いの体験をする。（２時間） 2　施設で働く職員から、高齢者の生き方から学んだことや介護についての体験談を聞き、「老い」について考え、命の尊厳に思いをめぐらす。（１時間）
4次（5時間）	○成長への支援に感謝し、未来に思いをはせる。 1　伝記づくりをとおして感じた家族や身近な人への思いを話し合う。（１時間） 2　家族からの手紙を読むことにより、自分の命は自分だけのものではないことを実感する。（１時間） ○未来の自分に宛てて手紙を書く。(タイムカプセルづくり) 1　大人になった自分の未来を想像することで、これからも自分の人生を大切に生きていこうとする思いを持つ。（２時間） ○今までの学習を踏まえ、「命」への思いをまとめる。（１時間）
事後	○自分の心の動きを振り返り、振り返りカードに記入する。

９　指導実践

(1)　１次第３時

ア　本時のねらい

大切な人（ペット）を亡くした体験を出し合い、命のかけがえのなさを実感する。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

我が子を亡くした親の手記を読むことをとおして、子を思う親の思いの深さに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

家族など身近な人にとっても、自分自身がかけがえのない存在であることに気づかせることによって、人とのつながりを感じさせる。

(ｳ) 想像力の育成

他者の喪失体験にふれることをとおして、他者の悲しみを推し量らせる。

ウ　準備物　なし

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) 現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定したり、子ども一人ひとりを把握することを心がける。

(ｲ) 大切な我が子を亡くした親の悲しみの深さが伝わるものとして、長崎小６女児殺人事件の被害者遺族である父親の手記（毎日新聞 2004 年６月８日掲載）を用意する。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	**１　今の自分にとって大切な人やペット等を思いうかべ、みんなに紹介する。** ・「わたしはお母さんが大好きで、一番大切な人です。」	・事前に、大切な人に関わる写真や思い出の物を持ってくるように伝え、自分の思いがよく伝わるようにさせる。 ・あなたにとって一番大切な人を紹介して下さい。
展開	**２　教師の大切な人を失った体験を聞き、その思いに共感する。** ・先生にもそんな悲しいことがあったんだ。 ・もし、今、先生のお父さんが生きていたら先生は何をしてあげますか。 **３　大切な人やペット等を亡くした自分の体験について話し合う。**	・教師自身の喪失の悲しみを語り聞かせることにより、自分の中にある体験を具体的に思い浮かばせる。 ・「先生は交通事故により、突然にお父さんを亡くしました。お父さんは、大学卒業直前の弟に最後の仕送りをした後に事故にあいました。その後、しばらく電話のベルが怖かったのです・・・。」

展開	・わたしは去年の夏前に、ひいおばあちゃんを亡くしました。おばあちゃんの使っていた物を見ると、まだ涙が出てきます。 ・家族みんなでかわいがっていた犬が亡くなりました。その時は本当に悲しかったけど、今は新しい犬を飼っています。でも、亡くしたら代わりはいません。	・悲しみが強くよみがえった子には個別に話を聴くなどの対応をする。また、喪失体験のない者には、今の自分にとって大切な人を亡くした時の思いを想像させ、発表者それぞれの思いに共感させる。
	４　長崎小６女子殺害事件被害者の父親の手記を読み、感じたことを出し合う。	・大切な人が命を失うことは、これほどにまで人に深い悲しみを与えるということを実感させ、自他共の命の尊さをつかませる。
	親が、我が子を亡くした悲しみとはどんなものかを感じとってください。	
	・親が子どもを亡くすと、こんなに悲しいんだ。ぼくのお母さんやお父さんも同じなんだろうと思う。 ・このお父さんは、奥さんを亡くして、また子どもを亡くしたんだ。心はぐちゃぐちゃになってしまうだろう。	・「先生も子どもが二人います。もし、突然にこの子たちのどちらかでも、こんな形で亡くしたとしたら、この女の子のお父さんと同じでしょうね。これから生きていく力もなくすでしょう。これは、みんなのお父さん、お母さん、世界中のお父さん、お母さんも同じ思いです。」
まとめ	**５　本時の学習の感想を書く。**	・今日の学習で強く印象に残ったことを書くように伝える。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 導入の「大切な人を思い紹介する」という場面では、もっと具体的になるよう文章化させたい。

(ｲ) 被害者の父親の手記は、子どもの心にしみ込んだ。

(ｳ) 学級での小動物の飼育に取り組む子どもたちの態度に、きめ細かさが感じられるようになった。又、保護者には、我が子の大切さをできるだけ言葉で表現してくれるよう依頼した。そのせいか、子どもたちから家族の話題が以前より多く出るようになったように感じた。

キ　振り返りカード

振　り　返　り　カ　ー　ド

年　　組　名前（　　）

	学習・体験の目標（めあて）	自分の振り返り
感動の体験	○自分を大切にすること、相手を大切にすることについて考えよう。	

感性を育む	○あなたの大切な人が、今までにあなたにどんなことをしてくれたか考えよう。	
想像力の育成	○大切な人を亡くすと、人はどんな思いをもつのか考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

(2)　２次第３時

ア　本時のねらい

自分や友だちの祖父母の人生の多様さを知り、伝記を作ろうとする意欲をもつ。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

どの人の人生も豊かなものであり、様々な体験を積み重ね今を迎えていることに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

自分の祖父母の人生に思いをやることで、祖父母への尊敬や慈しみの念をもたせる。

(ｳ) 想像力の育成

祖父母の生い立ちを知ることをとおして、これからの自分の人生に思いをはせ、生きることの尊さを感じさせる

ウ　準備物　なし

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) ゲストティーチャーには、子ども時代の生活や仕事への思い、子どもや孫の誕生時の喜び、大切な人との別れ等の悲しみについて詳しく語ってもらう。

(ｲ) 伝記作りは個人の情報が公開されることであり、必ず対象者の理解と同意を得た上で実施し、十分に配慮した取組が必要であることを認識する。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	**１　今までに読んだ偉人の伝記について出し合う。** ・野口英世は貧しさや障害に負けないで、自分の夢を実現したんだ。けれど、人間としては欠点もずいぶん多い人だったんだ。	・人生は多様であり、誰もがその中で喜びや苦しみ、悲しみを経験しながら生き抜き、素晴らしい生を生きていることを理解させる。
展開	**２　各自の祖父母のこれまでの生い立ちを発表し合う。** ・ぼくのおじいさんはお店を開くまで、たくさんの店で修行しました。 ・ぼくのおじいさんは、子どもの頃に両親を亡くしたので、中学校から一人で生きてきました。	・身近な人の生い立ちを数多く知ることにより、人生は多様であるということをあらためて実感させる。 ・祖父母のプライバシーには配慮し、内容については十分に理解を得てから発表させる。
	世の中には同じ人生なんて一つだって存在しない。おじいさん、おばあさんの人生だってその人だけの、たった一つのものです。それを深く感じよう。	
	３　ゲストティーチャー（児童の祖父・左官職人）の、今までの人生について話を聞く。 「子どもの頃から親方の家に住み込みで働いた。修行は厳しかったが、おかげで結婚もでき子どもができて、今は孫に囲まれ幸せだ。」	・友だちの祖父の生まれた時から現在までの生い立ちを聞く中で、人生には多くの喜び、苦しみ、悲しみがあり、それを経て今があることを理解させる。

展開	**４　ゲストティーチャーへ質問をする。**	・質問をとおし、一人の祖父母の人生をより深く知り、その長さと豊かさを感じさせる。
まとめ	**５　本時の学習の感想を書く。**	・次時からの祖父母の伝記づくりに向けて、情報の収集法や取材方法ついて考えておくよう伝える。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) ゲストティーチャーの話の中の、「人が“生”を実感するためには仕事が大切である。」との話は子どもたちの心に素直に入ったようである。

(ｲ) 人生の多様さを感じ取ることが、命の大切さを実感することにつながるよう具体的手だてをしっかり計画する必要がある。

(ｳ) この取組後、子どもたちの生活態度が大きく変わったとは言えないが、ただ、祖父母の伝記づくりをとおして、子どもたちが祖父母をより身近に感じ、その関係が今まで以上に密になったと保護者からお聞きした。

キ　振り返りカード

振　り　返　り　カ　ー　ド

年　　組　名前（　　）

	学習・体験の目標（めあて）	自分の振り返り
感動の体験	○どの人の人生も豊かなものであり、様々な体験を重ねることにより、今があることを理解できたか。	
感性を育む	○祖父母の人生を知り、今感じていることを手紙に書こう。	
想像力の育成	○祖父母の人生を知り、これから自分はどのように生きていこうと思うか考える。	

全体を振り返っての感想：

先生から：

家庭から：

(3)　４次第２時

ア　本時のねらい

親からの愛情の溢れる手紙を読むことにより、自分の命は家族や多くの人に支えられ生かされたものであり、大切にしなければならないことを感じ取る。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

自分の命は多くの人の支えによって誕生し、周りの人の愛情に包まれて育てられたものであることに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

自分を大切にすることは、両親や家族、周りの人の願いであることを実感させる。

(ｳ) 想像力の育成

自分と同じように、周りの友だちの命も多くの人の支えと愛情によって育てられたものであることに気づかせる。

ウ　準備物　なし

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) 保護者に子どもたちが誕生した時の喜びや成長を実感したエピソードなど親の思いを手紙に綴ってもらう。

(ｲ) ゲストティーチャーには、阪神淡路大震災時に避難所で体験したこと、そして娘の名前の由来を語ってもらうようお願いする。

(ｳ) ２次でまとめた自分の伝記と、幼少時の家族とのふれ合いの写真を準備させる。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	**１　最近の自分とお父さん・お母さんとの関係について話し合う。** ・勉強のことにうるさい。 ・勝手にぼくのかばんや机の中を見る。 ・わたしの着る服に文句を言う。	・思春期の入り口にさしかかった子ども達の、日常でのそれぞれの親への思いや不満等を出させる。
展開	**２　グループごとに、自分の伝記と自分の小さい頃の写真を見せ合い、思ったことを話し合う。** ・一緒に写っているお父さんもお母さんもうれしそうだ。 ・同じような写真ばかり何枚も撮っている。家族はわたしのことがかわいかったのだと思う。 **３　Ａ児への母親からの手紙を聞く。** **４　Ａ児の母親に当時の状況を聞く。**	・自分が写った写真を見ながら、自分が育ってきた今までの人生を振り返らせるとともに、それを写した両親や家族の自分への思いを想像させる。 ・Ａ児を妊娠中に阪神・淡路大震災により自宅が倒壊し、避難所での厳しい生活を余儀なくされたＡ児の母親は、避難所の中で多くの人に助けられ、Ａ児を無事出産することができた。そして、その感謝の思いを込め、Ａ児に「愛」という名前を付けた。そのことを手紙に綴ってもらい、読み聞かせる。

展開	**５　Ａ児の母親への質問や感想を出し合う。** ・Ａちゃんは、みんなのおかげで生まれてこられたんだ。 ・Ａちゃんが生まれたことは、みんなの喜びだったんだ。 ・Ａちゃんのことは、今でもみんなが見ているのとちがうかな。 みんなのお父さんはやお母さんは、君たちの誕生をどんな思いで迎え、どんな気持ちで今まで君たちを育ててきたのだろう。	
まとめ	**６　子どもたち一人ひとりの、両親からの手紙を読み、感想を出し合う。** ・ぼくのところの親も、Ａちゃんと同じようにぼくの生まれたことを喜んでくれたんだ。 ・お母さんがわたしを産むまでこんなに気を遣って、大変なことをしたとは知りませんでした。	・自分たちの誕生も、Ａ児と同じように喜びで迎えられ、両親にとってはかけがえのない存在であることを感じ取らせる。
	７　両親の手紙に返事を書く。	・日頃の両親への不満が、本時の学習によってどのように変化したかを見つめさせながら、返事を書かせる。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
(ｱ) 子ども達は、すでに、幼少時の写真を見てそれを写した人の思いを考えさせる段階で、両親の自分への愛情を感じ取ったようであった。
(ｲ) 本気で話した言葉の力は人の心にしみ込むものであることを感じた。

キ　振り返りカード

振　り　返　り　カ　ー　ド
年　　組　名前（　　）

	学習・体験の目標（めあて）	自分の振り返り
感動の体験	○自分の命は多くの人の支えによって誕生し、周りの人の愛情に育まれて生かされてきたものであることに気がつきましたか。	
感性を育む	○自分を大切にすることは、家族や周りの人の願いである事に気がつきましたか。	
想像力の育成	○自分と同じように、友達の命も多くの人の支えと愛情によって育まれてきたものであり、大切にされなければならないものであることに気がつきましたか。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

(4)　４次第３時

ア　本時のねらい

(ｱ) 自分の将来の姿を想像し、その自分に手紙を書くことにより、自分の人生を肯定的にとらえ、困難にくじけず強く生きようとする態度を培う。

(ｲ) 自分と同じように周りの人たちにも未来や夢があり、それは大切にされなければならないものであることに気づく。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

様々な出会いや選択、喜びや苦労などを経て、祖父母から両親へそして自分へとつながることによって現在があり、そして、それがまた未来へとつながっていくことに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

誰にも現在からつながる未来や夢があり、それは大切にされなければならないものであることに気づかせる。

(ｳ) 想像力の育成

自分の将来は自分一人だけのものではなく、多くの人たちに支えられながら築いていくものであることを理解させる。

ウ　準備物　タイムカプセルにするための容器

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) 子ども達には、事前に自分の将来の姿や夢を描き、文章化できる準備をさせておくとともに、両親の子どもの時の将来の夢を聞き取りさせておく。

(ｲ) 教師自身も子どもの時にもっていた将来の夢を語れるように準備しておく。

(ｳ) タイムカプセルの容器、並びに埋設場所を用意しておく。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	**１　祖父母の伝記から、一生における今の自分の年齢の位置を確かめ、人生の長さを再確認する。** ・まだこんな所か、先は長いなあ。 ・おじいさんたちは随分早くから働きはじめているな。	・祖父母の人生の長さを感じ取らせるとともに、人生には様々な節目と出来事があることに気づかせる。
展開	**２　聞き取ってきた両親の子どもの時の夢を発表する。** ・お父さんは漁師になりたかったけれど、家が漁師でなかったため、かなわなかった。 ・お父さんは町でサラリーマンをしたかったけれど、長男だから後をつがなければならず、農業をしている。 **３　自分の将来の夢を出し合う。** **４　夢を実現するために必要なことは何かを考える。** みんながもっている夢を実現するためにはどんなことが必要だと思いますか。	・夢と現実の差はありつつも、両親が一生懸命に働き今の暮らしを支える姿に思いを寄せることができるようにする。

展開	・自分で努力する。 ・資格を得るために親に大学に行かせてもらう。 ・仕事を教えてくれる人がいる。	・夢をかなえるためには、自分自身の努力とともに、多くの人たちの支えや協力が必要であることに気づかせる。
	５　20 年後の自分の姿を想像し、32 歳の自分に手紙を書く。	・現在６年生の子ども達は 20 年後には 32 歳になっており、多くの者は職業人として、または、家庭人として責任ある立場で頑張っているはずなので、そんな将来の自分を肯定的に想像させ、手紙を書かせる。
	20 年後の君たちは、そこに行き着くまでにはいろいろと大変なこともあったはずです。でも、くじけずにそこまで行き着いた未来の自分に、励ましと褒め言葉でいっぱいの手紙を書こう。	
まとめ	**６　書いた手紙を発表し、感想を話し合う。** ・ぼくはプロ野球の選手になろうとするがだめで、きっとサラリーマンをしている。 ・ぼくは英語を勉強して、外国で仕事をし、外国の人と結婚しているはず。	・自分だけでなく友だちにも未来や夢があり、だれの思いも大切にされなければならないことに気づかせる。
	７　タイムカプセルに手紙と一緒に入れる物品、20 年後の再会時の約束等を確認する。	・事前に指示したタイムカプセルに入れる物品、また、埋設時の注意等について確認をさせる。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 子ども達は、将来の自分を現実的にとらえていた。

(ｲ) 子ども達は、夢をもっていながらも、現実的に生きてきた親の話を聞き、親に対し親近感を持つとともに、生きるということを少し感じ取ったようだ。

キ　振り返りカード

振　り　返　り　カ　ー　ド

年　　組　名前（　　）

	学習・体験の目標（めあて）	自分の振り返り
感動の体験	○様々な出会いや選択、困難や苦労を経て、祖父母から両親へ、そして自分へと繋がることによって現在があり、そして、未来へとつながっていくことを感じられましたか。	
感性を育む	○だれにでも未来や夢があり、それは大切にされなければならないものであることについて考えよう。	

想像力の育成	○自分の将来は自分一人だけのものではなく、多くの人たちの協力と支えが必要であることについて考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

10　実践を終えて

(1) 先生の振り返り

Ａ児の母親の手紙は、震災時の記憶がほとんどない子どもたちの心にしみ込んでいった。これは、手紙が力のある良いものであったことと、本校が震源地の学校であり、震災体験を風化させないよう取り組んだ学習が下地になっていると感じた。

また、子ども達は普段、自分が両親や家族の愛情に包まれていることを強く自覚するような機会は少ない。そのため、今回のように直接的な言葉で両親から愛情を表現されることは、どの子も気恥ずかしい中にも喜びがあふれていた。この思いは自己肯定感につながり、これからの自分の将来を肯定的に考え、見つめる土壌となるはずである。

現地点において子どもたちは全員、将来の自分に肯定的であり、手紙の中でも頑張った自分を認め、褒めることができており安心した。ただ、この思いが、成長するに従い自分の能力に不安を感じ、現実が大きいものであると感じてくる中でどう変化していくかが気になった。

実践をとおしての実感として、大人は常に子どもたちに長い人生には苦しいこともあるけれど、うれしいこともたくさんあり、生きることは素晴らしいことであるということを語ることが大切だと考える。

(2) 今後の課題

子どもたちを他者の喜び、悲しみや苦しみに心からを共感できるようにするためには、家族や友人、地域の人々などとのふれ合い、また自然体験などの直接体験、読書や音楽を介しての感動体験などを重ねさせ、感性を培っていく必要がある。感性が育まれていないのに命の大切さを理解させることは難しい。学校がどのようにそうした場や機会を設定していくかが課題となる。

本実践の中では、「死」をみつめて「命の尊さ」を考えるという重いテーマを扱ったため、小学生には少々難しかったようである。このことは、計画段階から職員や保護者にも指摘されてはいたのだが、老人福祉施設での体験、大切な人を突然に奪われた人の悲しみ等を直に感じることにより、子どもたちの心の中に迫れるとの思いがあり進めた。子どもたちは命の大切さについて、それぞれに感じ取ってくれたように思うが、実践のねらいを達成するためには、老人福祉施設の職員や講師ともできるだけ打合せを行ってこちらの意向を伝えるなど、より綿密な準備が必要であろう。

また、アンケートや聞き取りをとおして、「死」は、子どもだけではなく保護者や地域の人たちにとっても現実感のないものであることを実感したが、子どもだけでなく、保護者や地域の人々の実態も充分踏まえることも重要な課題である。

11　参考・引用文献

・兵庫県教育委員会『「命の大切さ」を実感させる教育への提言』　2006